



あの日あのとき1963ふゆ

## やはり、地球は温暖化？

登別市幌別中学校3年のときだったか。クラスごとに雪像を制作して出来栄を競うイベントが行われた。クラス仲間と造ったのは、西洋風のお城=写真=。ともかくにも、グラウンドの雪をせっせと集めては盛り、水をかけては凍らせて、造り上げたのが高さ2メートルほどの、城といえばそれらしく見えなくもない雪像。完成後の記念写真におさまるクラスメートの顔が心なしか笑っている。あのとき、男子生徒はまた、学生帽をかぶっていた。

小さいころは、雪がどっさり降った、気がする。ときには、地域の悪ガキ集団の下っ端として、よその家の子たちが造ったカマクラを夜、スコップを手に壊しに行った。怒ったその家のオヤジが怒鳴り込んできて、玄関で母親がしきりに詫がる姿が脳裏に焼き付いている。家の前の通りに厳寒期、こっそり水をまいて凍らせ、だれかスッテニコロリしないか、と窓縁からうかがったこともあった。なんと悪い子だったこと。

それにしても今年は、師走に入って1週間もたつのに、一度降った雪はすっかり消え、この先もしばらく最高、最低ともプラスの気温が続くとか。これも、地球温暖化の影響か？

懐かしい一枚のモノクロ写真が、世俗にまだ汚されていない、無垢なる白い時代に連れ戻してくれた。



13号

## お蚕(カイコ)を巡る話

### 1) カイコだけが絹を吐く

「読売ヨタ者、毎日マユツバ、朝日のニセ紳士」とは、かつてのマスコミ界で流行った日本の三大紙に対する戯れ言というか、ヤユというか。まあ、当たらずとも遠からず、かな。

ジャーナリズムの先達、故・扇谷正造氏の著書「諸君！ 名刺で仕事をするな」に書かれていたと記憶する。表題の意味するところ。「相手に渡した名刺の真ん中にくるのは、キミの名じゃない。朝日の社名だ。そして取材を重ね信頼を勝ち取って、初めて、君の名前が真ん中に座るんだ」

新聞社に限った話じゃないが、けだし名言ですね。その本の中で「カイコだけが絹を吐く」のプロットがある。世界に昆虫数あれど、繭(まゆ)のフンを出すのは蚕だけ。いわんとするところは「他人の真似でなく、自分なりの仕事をせよ」ということらしい。

### 2) 信州で見ました、お蚕サマ

はたちの時、信州を旅していたら、道端に立つおばあちゃんから「おや、帰ってきたかい」と声を掛けられました。孫が帰省したと勘違いしたらしい。それがきっかけで、お蚕小屋を見せてもらいました。

「ワジャ、ワジャ、ワジャ」と桑の葉を食べる音が、今も耳に残っていて、おばあちゃんが繰り返す「お蚕サマ」なる言葉も耳に響きました。白いシャクトリムシに似た、北海道人には馴染みがない虫に「サマ」を付けるとは、ちょっと大げさすぎないかと思ったが、あれから五十年余。現在放送中のNHK大河ドラマを見ていたら、「やはりなあ〜」と納得。

### 3) しかし養蚕は、この地でも

だが、この登別でも、かつて養蚕が行われていました。皆さん、ご存じですか？

昭和63年発行の「市史ふるさと登別 上巻」を  
(裏面に続く)

## 桃柿通りの四季

開くと、載っています。

明治3年、宮城県白石から幌別郡支配を命じられ開拓に入った武士団が、故郷の三白（紙・ウーメン・生糸）を思い起こし、養蚕に挑みました。以下はその書き出し。

「幌別からも絹の道 『なんとここは山桑の里だ』と入植した当時の片倉主従は目を見張った」（P323）

以降、幌別郡に移住した旧臣らは、この地方の野性の山桑に目をつけ、養蚕業に尽力。しかし、一時期軌

(5) 移民で築く・開拓使時代



翌九年には村民が蚕業協議会を開いた。遠藤はだんだん踏み固まってみて、忙しく世話の日々を過ごした。

蚕室での養蚕

すち取規片天た高た八は 養  
るり模手井。二片は 養

「市史ふるさと登列」より

道に乗ったものの、気候や山林の乱伐などから衰退の一途をたどるなど、その変遷が記されています。

山桑の木、手っ取り早く探すなら、若山町の「キウシト湿原」散策がおすすめです。ただし、今は冬季閉園中で、実のなる初夏が見ごろかと。

\*\*\*\*\*



### おすすめ本

## 「スマホ脳」アンデシュ・ハンセン著

室蘭の本屋さんでためらうことなく買い求めたのには、わけがあります。

11月の下旬、某駅前の焼き鳥屋で開いた忘年会に、車での迎いをあえて断り、久々にバスと列車でやってきた元同僚が、列車内での光景に目を見張ったという。

座席のほとんどを占領している高校生がほぼ全員、スマホに見入っていて会話はゼロ。マイカーで通勤したり、用事で移動している彼にとっては、衝撃的な場面に出くわした、といったところか。

スマホやパソコンに功罪は諸説あるものの、「IT企業トップは子供にスマホを与えない」「心の病が増えたその理由」「幼児にタブレット学習は向かない」などなど、裏カバーに並んだ文言が警告を発しています。

中身も世界の人気を得た精神科医らしく、説得力あり。ご一読をおすすめします。



今年も100個ほど実をつけた我が狭小ガーデンの樽柿の木。カミさんが食べて残ったタネから鉢で育て、庭に移植して25年以上になる。小ぶりなため、2度ほどチャレンジした干し柿作りは苦心惨憺たる結果に終わった。

しかし、見つけました。干し柿以外の方法で甘くする裏技を。リンゴと一緒にビニール袋に入れ、1、2週間ほど、冷暗所に置いとくと、皮がうすくなり甘柿に変身するというじゃありませんか。

というわけで、握りこぶし大の鈴なりの実が黄色から赤く変わるのを、虎視眈々と狙う毎日。新戦法の成果は次号にて、ご報告します。

## 薫風 烈風

▶6週間に1回、お世話になっているクリニックの掲示板が面白い。この前までは「秋の味覚選手権」と称して、サンマや栗、鮭やマツタケなど8種類の食べ物のいずれかに、来院者がシールを張る人気投票が行われた。結果はダントツ1位が柿で70票、最下位はもちろん庶民には手が出ないマツタケの6票。その中でシールの張り方がバラバラだったのは「ブドウ組」。我が道を行くタイプが多いーと性格占いしてしまった。

で、今回のイベントは「川柳大募集」。玄関に、投稿ボックスを置き、「元気の秘けつ」「年金」「温泉」のテーマで、一句ひねってもらおうという趣向だ。

腕がなった、否、筆がなった当方も、二句投函しました。

「二千万？ 貯まる前に あの世行き」（念 金太）  
「カゴどこだ 下着探して 三千秒」（任 智生）  
入賞するかな？

▶師走りです。別に忙しい身ではないのですが、今月号もメドとしている月なかばを待たずの発行です。インフルエンザワクチンも打ちました、さあ、正月を迎えられるか、勝負！ 皆さん、お元気で〜。